原爆被爆者の「思い」を伝えることの意味に関する検討
――聞き取り調査の結果と A. シュッツの「他者理解」を手がかりに――

武蔵大学　徳久美生子

（目的）

直接原爆を体験した原爆被爆者たちが高齢化し、減少し続ける中で、広島市は 2012 年度から「被爆体験や平和への思いを受け継ぎ、それを伝える」被爆体験伝承者を養成している。本報告では、被爆体験という理解困難な他者体験、そして平和への思いという漠然とした感情を受け継ぐとはどういうことなのか、さらに伝えることにどのような意味があるのかを明らかにする。

（方法）

この点を明らかにするために原爆被爆者たちへの聞き取り調査と A. シュッツの他者理解の理論を参考にする。聞き取り調査の結果、原爆被爆者たちの「思い」の内実がひとつの物語には回収できない多様なものであることが明らかになった。また彼 / 彼女らの被爆体験には、必ず不在の他者である死者たちが介在している。死者たちとの関係は、被爆者であることそして人間であることのゼロ点でもある。このような彼 / 彼女らが抱える死者たちへの思いは、死者たちとの関係の相違、それぞれの立場や体験の違い、その後の生き方の違いによって多様である。それでは、このような多様な思いが伝わることをどのように考えれば良いのか。

（結果）

A. シュッツは、他者の体験を自身のこととして受けとめることを他者理解の基礎においている。シュッツは言う。「社会的世界に素朴に生きる私にとって、他者の行為は、私が次のように想像できる場合に限って理解可能であると言うことにある。すなわち、私が、その他者と同一の状況にいて、同一の動機に導かれ、同一の目的動機によって方向付けられているのであれば、私もまた、その他者が遂行した行為と類似の行為をするであろう、と想像できる場合である」（Schutz1976=1991: 32）。

被爆体験の伝承とは、同時代者である証言者の思いを、未知なる存在である継続者に伝える作業であり、そこには具体性と匿名性を異にする様々な体験構造から成る内的成層が含まれている。したがって、「同時代者の世界と先行者の世界は、ともに理念的類型化によってただ媒介的にのみ体験することができる」（Schutz1976=1991: 91）。だがこの理念的類型化が先行者の体験の理解につながる道筋はある。シュッツは言う。「理念型の具体性ないし相対的程度は、彼ら関係 - その一部を成している或る所与の類型 - がどの程度容易にわれわれ関係に移し変えられるかという、その容易さの程度と結びつけて考えられるべきである。「誰か或る人」の理念型的な特性が、或る具体的な個人の進行中の意識生の要素として直接的に把握される見込が高ければ高いほど、それらの特性の匿名性の程度はますます低くなる（Schutz1976=1991: 79）。

（結論）

被爆体験という先行者の他者体験をその内実である死者への思いから理解し伝えるためには、それが或る具体的な個人の進行中の意識生の要素として直接的に把握される見込みが必要となる。この時ひとつの物語に回収されないバラバラで個別的な多様な思いは、進行中の意識生の要素が見出される可能性の領域となる。そして継続者たちが「先行者の体験は人間のした体験であったと」（Schutz1976=1991: 92）知ること、ここに原爆被爆者たちの思いを伝える意味を見出すことができるのではないか。

〈参考文献〉

Schuz, A., 1976=1991, 渡辺光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第３巻：社会理論の研究』マルジェ社.